

run mad/funny balance

chrcc

抵抗すれば、抵抗するだけ殴られた。強かに、打ち付けられた。

初めのうちは開いた手の平で叩かれた。殴る、とは違う。派手な音は上がるが、痛みはそれほどでもなかった。叩かれた箇所が段々と赤く染まる様子を冷静に見つめることもできた。

そのうち、充は握りしめた拳で僕を殴りはじめた。鈍い音がした。充の拳が僕の身体を殴りつけることで発せられる、鈍い音が怖くなった。痛みも、叩かれていた頃とは比べ物にならない。顔を殴られた拍子に口内の皮膚が切れ、血の味がした。

仰向けにされた僕の身体に、充は馬乗りになっていた。見上げても、逆光で彼の表情は分からない。押さえつけられた腕を動かそうと、力を込める度殴られた。5発までは数えたが、それ以上は数えていない。腕はすっかり怠くなり、気付けば着ていたシャツでベッドの足に括り付けられていた。

ひ、と、息を吸う。血が混じった唾液が喉にまとわりつく。咽せた。凶暴な動物の鳴き声のような音が喉から聞こえた。開いた唇に、すかさず充の唇が重なった。そのまま、舌が進入してくる。口内を蠢く充の舌を伝い、彼の唾液が濡れている僕の舌を更に濡らした。口内に溢れる唾液を、飲み込む。自分以外のそれを飲み込んだと思えば、途端に嫌悪の気持ちが襲う。ごぼりと、沸騰にも似た音がして、胃液が逆流してきた。充の舌は、未だ口内にある。充の舌は、未だ口内にあるのに、吐いた。餿えた匂いの液体に頓着せず、充は僕の上顎を舐める。舌が蠢動する。

初めて、涙が、零れた。

天井の蛍光灯の光が、微かに震えた。

それは、すでにセックスではなかった。

愛撫を行うべき時に殴られ、体内に異物を挿入される痛みは、殴打の痛みによって掻き消された。喘ぐのは痛みのためで、決して快樂からくるものではなかった。

犯されたのは身体ではなく、尊厳や、何処にあるかも分からぬ心、である。

行為の後の充は、優しくかった。犯されたことが夢幻であるかのような優しさを与えられて、腫れた脛の理由を見失いそうになっていた。

脛が腫れた理由は分かる。泣いたからである。暴力的に犯され、涙したからだ。

では、暴力的に犯された理由は何なのだ。充が、僕を、蹂躪した理由は、何だ。

同じ会社の後輩である充と、間違っただけの接し方をしてはいなかった。間違っただけの接し方はしていなかった筈である。公的な付き合い方を行い、ある程度のラインから向こう側には踏み込まないようにしていた筈である。

何故あんなことをされたのか分からなかった。

充に後ろから抱きかかえられ、しっかりと手を握られていた。充は僕と同じ様な体躯であるのに、手だけ、やたらと大きい。充の手の平は、しっとりとしていた。

汗に濡れた髪が額に掛かる。先ほど吐き出した物は全て、充によって拭われた。しかし、匂いまでは拭われずにいた。吐き出した胃液の匂いと充が放った精液の匂いを纏い、僕は、目を閉じた。

眠ってしまいたかった。自分を犯した男の腕の中で眠ることには些かの抵抗を感じるが、それでも構わない。疲れていた。眠ってしまえば、何もかもが起こらなかつたことになるかも知れないと考えるほどに、疲れていた。

充の息遣いは濃く、耳に付いた。鬱陶しい。目を閉じてても、眠ることは出来ない。

視覚は脛によって遮られている。無意識に、充の息遣いに自分の呼吸の速度を合わせていた。

呼吸の速度が重なる。

「好きだったら」

笑いの混じった声が背中から聞こえた。

振り返ることはしなかった。首筋の匂いを嗅ぐ気配がした。すん、と鼻で息を吸い込む気配がした。ざらりとした濡れた何かが、首筋に触れた。充の舌である。

首筋を舐めている充は、くすくすと微かな笑い声をあげていた。

「好きだったら、こんなこと、しない、よ？」

好きだったら、アンタの事、犯したり、しないよ？こんな遣り方でセックスなんか、しない。

「分かんない、でしょう？」

充の手は、微動させることさえ出来ぬほど強い力で僕の手を握っていた。

「アンタ、莫迦だから、分かんないよ」

笑った。

嘲った笑いが、肩に触れた。さわさわと肩を撫でた。

僕が信ずるべきは、強く握られたこの手か、背後で揺れる嘲笑か。それとも、そのどちらでも無いのだろうか。

考え、強く握られた手に、何を期待しているのかと、今度は僕が嘲りの笑いを上げた。

それは静かな、けれど、狂った笑いだった。

首筋に、ちくりと、僅かな痛みが走る。充が、そこを吸い上げ、痕をつけている。僕からは見えない場所に、赤く痕が咲く。

奇妙だ。

何もかもが、奇妙である。

奇妙なこの空間で、赤い痕が二つ、三つと咲く。

五つ咲かせて、充が、また、笑った。